

序曲

僕が我に返ったのは
雑踏の中で或女の背中を見つめていた時だった
雨が降っていたが彼女は傘をさしておらず
僕は自分の傘を彼女に捧げようとした
僕が我に返ったのはその時だった

眠りから醒めた者のように目をしばたたくと
周囲を歩く人間達は流れていた
しかも立ち停まって傘を手にした僕の横を次々と！
ついさっきまでは僕もこの流れとともに在ったのに
現在、僕は「世界」から放り出されていた

雨粒が傘に当たるぶつぶつという音

(1991.9.30)